

アール・ブリュット・コレクション 巡回旭川展企画事業

特定非営利活動法人

LapoLapoLa (北海道旭川市)

平成19年度 高齢者・障害者福祉基金

「地方分」助成団体

DATA

〒070-0037 北海道旭川市7条通6丁目シャンノール緑道101

TEL&FAX: 0166-29-3836

http://npo.lapolapola.com/

e-mail lapolapola@able.ocn.ne.jp

今号では障害者の芸術を多く掲載しています。ここでも、障害をもつ方の作品を一般の方にも知ってもらおう活動を展開している団体を取り上げます。

その団体は特定非営利活動法人「LapoLapoLa」。さあ、何と読めばよいのでしょうか。またそれには何か意味があるのでしょうか。

平成19年度当時は団体の代表理事であり、現在もプランナーとしてご活躍する工藤和彦さんにお話を聞きました。

悠久な大自然に囲まれて

札幌駅から函館本線に乗ります。車窓からは北海道の広大な大地が終わりなく続いていきます。本州に慣れていない人間にとって、空気も風景も新鮮なものです。

約1時間半程度で旭川駅に着きます。旭川市は現在人口が約35万人。北海道では札幌市に次いで2番目に人口を有する中核市です。最近では旭山動物園の大盛況のイメージがありますが、駅構内でも至るところに旭山動物園に関する案内などがありました。

駅からすぐに平和通買物公園に出ます。こちらは、1972（昭和47）年に開設された全国初の恒久的な歩行者天国です。歩行者専用道路として、かなりのスペースを確保してあるので、とても広々としている印象です。駅から基盤目上に区画が整備されていることも、広く感じるところにつながるのかもしれませんが。

この平和通買物公園をしばらく歩き、7条緑道を左に進みます。ここまで10分余、コンクリートの舗装も比較的新しく、なかなかモダンで洗練された町並みです。そのようなくおしやれな街に共存しているボーダレス★アートギャラリー「LapoLapoLa」。その周辺が一つの共同体のような気がして



旭川の町並み

きました。すてきな作品がギャラリーの中から次々と顔を出してきます。

Lapolapola ラポラポラと読みます

ギャラリーに入ると、いわゆる「アウトサイダー・アート」「アール・ブリュット」といわれる作品が所狭しと並んでいます。たまたま取材時は、人間の背丈くらいの高さの作品を通路のように並べていたのでインパクトがあり、作品に圧倒されてしまいました。初めて見る者にとっては、そのすばらしさをなかなか表現できません。色彩豊かで、ダイナミックで、いろいろと言葉に出してみようとはするものの、



ボーダレス★アートギャラリー LapoLapolaの入口

なかなか適切なものが浮かびません。少し落ち着いたあと、以前は特定非営利活動法人「LapoLapola」（以下、ラポラポラ）の代表理事であり、現在はプランナーとして活躍されている工藤和彦さんにお話を伺いました。

「LapoLapolaはラポラポラと読みます。アイヌの言葉で『はばたく』という意味です。『ポラポラ』ということもあるみたいだけれど、みなさんの作品がはばたいてほしいという願いをこめて団体の名称にしました」と工藤さん。こちらは2006（平成18）年に立ち上げました。

ラポラポラの4つの柱

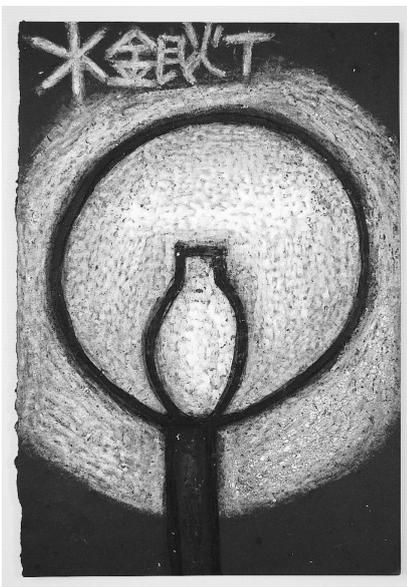
ラポラポラでは、障害のある創作者の芸術活動を支援することを目的に事業を進めています。「そもそもアート（表現）には障害の有無は関係がないんじゃないのかな」と工藤さんは言います。そのような観点から、以下のような具体的な活動になっています。

● 創作支援活動

創作活動を行う障害のある方や関係する施設によっては、活動するうえで画材の確保や支援するスタッフの負担が大きいところもあります。そのような方々に、画材の提供やアートスタッフの派遣などの支援をしています。

● 展覧会の企画

障害のある方の作品は一般的なアートの概念の中では理解されず、発表の機会は少



「水銀灯」畑中亜未（北海道札幌市）

ないのが現状ですが、世界的には「アウトサイダー・アート」「アール・ブリュット」としてとらえ、評価する方向にもなっています（23ページからも掲載）。

ラポラポラでは、障害のある方たちの作品をよりよい形で発表できるように展覧会を企画しています。

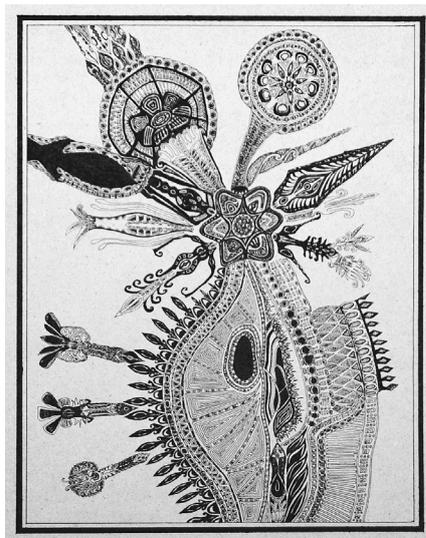
● 情報収集と発信

障害のある方の作品は、周囲の人から芸術的なものと思われず廃棄等されてしまうことが多々あります。ラポラポラでは、創作活動を行う障害のある方に関する情報を収集し、冊子やインターネット等を利用して広く社会に発信しています。

工藤さんは福祉的視点と美術・芸術的視点の融合の必要性を説きます。

「例えば、福祉施設の職員からしてみたら、利用者が作業で作ったものは単に作業でできただけのものとして見るかもしれない。ただ、芸術を専門的にやってきた人間が見てみると『なんてすばらしい作品なんだ』ということも実際にありうることで。職員の方からすれば、利用者の生活の支援に精一杯取り組まれているわけですから、そこにプラスして芸術の観点をというのはすぐには難しい。だからこそ、芸術と福祉のこの二つの融合は必要なのです」。

双方の連携によって相乗効果が生まれ、



【無題】 藤井晋也（北海道滝川市）



【無題】 大梶公子（北海道深川市）

ひいては利用者やその家族にベネフィットをもたらすことになっていくのでしょうか。

● 作品の企画、販売

創作活動に取り組む障害のある方にとつ

て、作品から収入を得て自立していくことはすばらしいことです。多方面で協力し合い、作品を商品化して経済的支援をしています。

「工藤さんは陶芸家 それとともに福祉の現場にも

工藤さんは神奈川県の小田原市のご出身。本職は陶芸家でいらっしゃいます。

高校を卒業された後、陶芸家をめざして信楽焼しからきの滋賀県へ移住。陶芸家に弟子入りし、3年間みっちりと修業されました。そんな中、福祉施設で作られた陶の作品を知りました。たまたま滋賀県立信楽学園の職業指導員が募集されているのを知り、「福祉施設で創作されている人たちとともに過ごすことで、何か学べるのではないかと思いました。おまけに給料まで補償されているので、ありがたいことでした（笑）」というところで福祉の世界にも足を踏み入れ、信楽で2年、北海道で3年、福祉の現場で働くことになりました。

「施設での仕事はとても楽しいものでした。自分が培った陶芸の技術を福祉的な作業の中で生かすことができましたからです。休日も関係なく、1日20時間以上働くことも普通でした。日常の業務から翌日の準備まで、徹夜してしまうこともしばしばです」。

そんな状況ですから、朝、起きられないこともあります。一度、朝の会議に遅刻してしまったことがあったようです。

「会議室で寝ていれば無論、起こされるので遅刻することがないことに気づき、それからは会議室の机の上でよく寝ていました（笑）」。毎日、過酷ではあったけれど、仕事というより工藤さんにとっての生活そのものでした。

工藤さんが施設の職員になっての大きな成果は、障害のある人たちの作品の魅力の本質を知ることができたことです。

「それは彼らの『哲学』にあると思うのです。生まれてから周囲と調和しながら過酷な運命、環境の中で生き抜いていく過程で培った『哲学』がダイレクトに表現されているからこそ、作品にじみ出てくるのだと思います。このことは福祉施設の職員になって多くの体験を積まなくては、知ることができなかつたことです」。作家として一番重要な根幹を福祉施設で学ぶことができました。

「滋賀から北海道に移住 アールブリュット巡回展の開催に至るまで

工藤さんは福祉施設での陶芸を担当した後、旭川で独立されました。しかし、福祉施設を退職後も障害者のアート作品の展示

に尽力され、2006（平成18）年にラポラポラを設立。その活動の中で、海外で世界的に評価を受けているアール・ブリュット・コレクションと、日本の作品とを並列に展示し、多様な表現を知ってもらうための展覧会「アール・ブリュット／交差する魂」北海道立旭川美術館展を企画し、福祉医療機構の助成を受けて2008（平成20）年1月16日から2月17日まで開催しました。

厳冬の中にもかかわらず、当初の予測を大きく超えて2174人も来館者がありました。この時期の展示会は入場者確保が非常にむずかしいのですが、大変好評を博しました。これまで知られていなかった表現に興味を持つ人が増えた結果といえましょう。

また、その後NHKの教育テレビ「新日曜美術館」で開催の様子が紹介されました。こちらも画期的な出来事でした。

今回の助成事業は、アール・ブリュットという国内で知られていない芸術を日本で紹介するだけにとどまらず、別会場にて地元作品の展示、勉強会、シンポジウム、創作現場への視察を開催することで、道内の障害者の埋もれているアートを掘り起こすという意味においても、先駆性、独創性が極めて高いものでした。

「海外のコレクションは借料が高く、機構の助成で助かった」と機構の基金助成が、国際的な展覧会開催の一翼を担っていることが感じられました。また、地方分の助成ということで、地方から世界基準の作品が発信されたということもいえるでしょう。

今後の福祉と芸術の融合

工藤さんの多岐にわたるご活躍は、各方面でも広く知れ渡っています。芸術と福祉の融合について立正大学に講師として招かれ教鞭をとられたこともあるそうです。

そういった中で、工藤さんは障害のある方が施設で創作された作品を、アートとして見せていく「空間づくり」というのがとても重要だと考えています。

「例えば、芸術作品としての展示と福祉での展示では、同じ作品であっても見え方“価値”が変わってきます」と工藤さん。

作品と鑑賞者が対話できる空間を演出することで、作品が持っている哲学的な思想が内面からにじみ出てくるのだそうです。そこには障害の有無に関係なく、「作品重視」という視点があります。

ラポラポラでは今後、道内のアーティスト、美術館、福祉施設とのネットワークを



サトちゃんの群像。『無題』横山篤志（北海道富良野市）

佐藤製菓株式会社のキャラクターをモチーフにした「サトちゃん」（横山篤志）というのがあります。作者は10年間以上この作品を作り続けています。この方の中には佐藤製菓株式会社の広報によってその創作活動が知られるようになりました。工藤さんは「継続することで周囲の視線も変わってくる」と語ります。

結んでいく予定で、来年度もさまざまな事業を準備しています。

それだけでなく、工藤さんが滋賀県にも在住され、特集でも掲載する滋賀県社会福祉事業団ともつながりがあることから、今後もコラボレーション企画等を通じて障害のある方たちの作家活動のさらなる発展が期待できるでしょう。